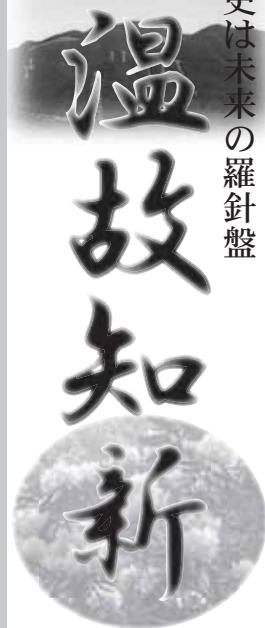


歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」は各公民館や教育委員会において一冊四〇〇〇円（税込）で販売中です。ぜひお買い求めください。

女工さん

日野は江戸時代から売薬業が盛んでしたが、近代に入り、その製造を支えたのは女工さんと呼ばれた女性たちでした。

女工さんは工場の近隣に住む女性たちで、製造補助や包装・箱詰めを行っていました。

聞き取り調査によると、昭和初期には午前八時から午後六時までの労働時間に、月に二日しか休みがないところもあったようで、大変な労働だったようです。

しかしながら、この会社では、タクシーが日野にきたばかりの頃、タクシーが珍しかったので、会社の社長が一台チャーターし、松尾の工場から馬見岡綿向神社まで、女工さんたちを交代で乗せて何度も往復したことがあったそうです。その時には女工さんたちがキャーキャー騒がしかったなどの微笑ましいエピソードも聞き取ることができました。当時のあたたかい会社の様子が伝わってきます。

昨年十一月末に『近江日野の歴史』第六巻「民俗編」が刊行されました。このような女性たちのことは、「民俗編」で詳しく紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

（世間の厳しさを知る）とも言われました。
また、長く勤めた人は、女中頭になったり、見習いの教育係的な役割を果たしたりしました。
こうした女性たちが日野商人を、ひいては日野の町を支えてきたのでした。

いました。夫が留守の間、不用心なため、玄関に男物の下駄を並べる「用心下駄」をして、家を守ったといえます。
また、女性が働く時には、女中奉公という形が多くとられました。
日野商人のお店では、女性を雇いしなかったため、日野の本宅などに住み込みで女中奉公をしていました。関東後家でもある本宅の奥様の下で家事などを行っていたのです。

奉公では、「お仕着せ」といって、季節に応じて主人から着物などが支給されました。丁稚奉公では、着物や足袋・下着など実用的なものが目立ちますが、女中奉公では下駄や帯・小間物など女性特有のものが支給されました。また、「やぶ入り」といって盆・正月に実家に帰る習慣も戦前まで残っていたようです。

女中奉公は、行儀見習いを目的にする人が多く、「塩踏みに行く」

町史編さん室では、町史の刊行に向けてさまざまな調査を行っています。今回は、その一環として行った民俗調査の成果のなかから、日野の女性に焦点をあて、「関東後家」と「女中」、「女工さん」について紹介します。

関東後家と女中

日野にまつわる女性の中で、特徴的なものとしてあげられるのが「関東後家」です。

関東後家とは、夫が関東などの出店で働くお店持ちや奉公人など（彼らを「関東兵衛」と呼びます）の奥さんのことです。一年の大半を夫と離れて過ごす事からこのように呼ばれていました。

夫が関東などにいる間、農作業や家事の一切はもちろん、村役も夫に代わり勤めました。また、家計を助けるために内職などもして



▲葉の箱詰め作業をする女工さん（昭和28年頃）